

### ① 甕岩 (こしきいわ)

女性守護の神

御本殿の背後の一大霊岩を名づけて「甕岩」という。高さ10メートル、周囲30メートルの花崗岩の大怪岩である。岩上には雑木が生じて、社名・地名もこれにより



起こった。室町時代の俳人、山崎宗鑑(1464~1553)は即興の句を吟じた。「照日かな 蒸ほど暑き 甕岩」甕の意味は、方形・円形の、米などを蒸し炊く器で、「せいろ」ともいう。撰津名所図絵(天保7年・1836年)や撰津志によると「甕岩神祠は越木岩村にあり、祭神巨岩にして倚豊甕きるいこしきの如し、此地の産土神うぶすなかみとす」と記してあるように霊験あらたかな霊岩であり、「安産の神としても有名である」

### ② 一鍬池 (ひとくわいけ)

現在の北夙川小学校(石叅町)が建っているところ。昔はヒシが沢山なっていて、その後ハスも一面に広がってきれいな花を咲かせていた。

あんな大きい池を一鍬で掘れるはずがないが、弘法大師様は



昭和20年代の一鍬池 (航空写真)

平安時代初期のお坊さんで、真言密教と言う宗派を興した、えらいお人であるが、あらゆる事に天才的な能力を持った方で、四国の満濃池を始め多くのため池を手がけている事から、お大師さんにおすがりすれば、たちどころに何の苦もなく出来た処から一鍬池と言う名前をつけたのではないかと思われる。甲山には神呪寺かんのうじがあり、その西には鷲林寺じゅうりんじがあり、近くには榮潤寺えいじゆんじがあるが、いずれも真言宗の弘法大師ゆかりのお寺であり、その当時はお大師さんへの深い信仰があったのではないだろうか。

### ③ 弘法大師 (こうぼうだいし)

平安時代初期宝亀5年~承和2年(774~835)の僧。わが国真言宗の開祖。諡号は弘法大師。讃岐の人。父は佐伯氏、母は阿刀氏。幼名真魚。延暦7年(788)伯父阿刀大足とともに入京。791年大学に入るが退学して仏道を志し、四国の難所で苦行を重ね虚空蔵求聞持法こくうざうぐもんじほうを会得した。23歳で大日経に出会った空海は、797年京に戻り「三教指帰」を著した。延暦23年(804)遣唐使として唐に渡り、長安で青竜寺けいかあじやりの惠果阿闍梨



に師事して密教みつぎょうを学び胎蔵・金剛たいざう こんごう両部、さらに伝法阿闍梨でんぽうあじやり かんじょうの灌頂かんじょうを受けた。大同1年(806)わずか2年で帰朝きちよう、弘仁7年(816)高野山に金剛峰寺こんごうぶじを創建そうげいしゆちいん。天長5年(828)綜芸種智院そうげいしゆちいんを設立。詩文に長じ、また三筆の一人。

その他、医学・土木技術などにも才能を発揮し、四国の満濃池や伊丹こやいけの昆陽池などを修築した。また越木岩においても、一鍬池を掘るなど全国にその足跡を残している。

### ④ 甲山 (かぶとやま)

西宮のシンボル甲山は標高309.4m、おわんを伏せたような美しい形をしている。古い火山活動で盛り上がった地盤が長い間に徐々に浸食されて今になったもので主に花崗岩かこうがんや安山岩など火山岩からできている。この「甲山」の名の起りはさまざまな説がある。いにしえにその頂いただきに神が降りたもう「神の山」から甲山になった、あるいは大阪湾から見て「向こう山」が「武庫山」さらに「甲山」となったとする説。もっとシンプルに、山がカブトの形に似ているためとか、その昔神功皇后じんぐうごうが遠征の帰途にこの山にカブトを埋めたため、とする説があります。

## ⑤ 水車小屋

水車とは、水の重さを利用してエネルギーとし、銘酒の吟醸めいしゅ ぎんじょうに必要な酒造米さかづくりまいを極度に精白せいぱくするために、活躍したものです。

この地域では、夙川東岸の獅子ケ口の扇状地に用水路を設け、それに沿って多くの水車小屋が並んでいた。しかし、明治38年に阪神電車によって電力が供給されるようになって減っていき、昭和50年頃最後の1ヶ所が取り壊された。

## ⑥ 弁天様(弁財天)市杵島姫命(いちきしまひめのみこと)

市杵島姫命いちきしまひめのみことは、天照大御神あまてらすおおみかみと須佐之男命すさのおのみこととの誓の際に生じた神。後に無理矢理、弁財天と同一神としてこじつけられ、また市神いちがみ(各地の市の立つ場所にまつられた神)として信仰された。弁財天は、美音天とも称す。琵琶を弾じていることが多い。もと河川を神格化したもの。吉祥天と共にインドでもっとも尊崇された女神。後世、吉祥天と混同し、福德賦与の神として弁財天と称され、わが国では七福神の一人として信仰されている。当地では、社は、甌岩いづろいわの南前にあり、霊岩甌岩の前神様としてご神体を守るがごとくまつられている。

## ⑦ 蛭子大神(ひるこのおおかみ)

伊耶那岐命いざなぎのみことと、伊耶那美命いざなみのみことの二神の間に生まれた第一の子、3才になっても脚が立たなかったために、葦舟あしぶねに乗せられて海に流された。葦で作った舟は邪気を払ってくれる。女が先に声をかけたため、骨なしの子ができたと言われている。また、天照大御神あまてらすおおみかみの別名「大日靈尊おおひるめのみこと」に対して「日る子」の意で、男性の太陽神が存在したものともしう。中世以後、これを恵比須えびすとして祭った。水蛭子ひるこ「骨のないヒルのような、できそこないの子」の意。

天照大御神あまてらすおおみかみや月読命つきよみのみことや須佐之男命すさのおのみことと同じ兄弟。【古事記参照】

## ⑧ 越木岩神社

現在の御祭神は、蛭子大神ひるこのおおかみである。創立不詳と言われるくらい由緒深く、甌岩を霊岩とし、今なお全国的に信仰を集めている。

また古代信仰の磐境いわさか・磐座祭祀いわくらさいしと呼ばれ



越木岩神社拝殿 (昭和58年)

学術上貴重とされている。今を去る千年前の延喜式神名帳えんぎしきしんめいちょうにある大国主西神社おおくにぬしにしじんじやは、当社であろうと思われる。

正保年間(1644年頃)に社殿が再建され、明暦2年(1656年)8月16日に円満寺の教順僧侶が「福の神」の総本社西宮えびす神社より蛭子大神かんじょうを勧請し、蛭子大神宮と称した。明治5年村社に列せられた。以後数回社殿は修覆されたが、現在の見事な片削破風流造の御本殿は昭和11年に、拝殿は昭和58年に御造営になったものである。秋の例大祭は、9月22日に執り行われる。また、だんじり巡行は、9月22、23日の二日間行われ、夜に行われる苦楽園口駅前の練り回しは、勇壮華麗で有名である。

### 境内末社

岩 社	甌岩神祠 巖島神社の御分霊 「市杵島姫命」(いちきしまひめのみこと)
六甲山社	菊理姫大神(くくりひめのおおかみ)
雨 乞 社	貴船大神・龍神
土 社	大地主大神・地鎮祭の神
稻 荷 社	白玉稻荷・大崎稻荷・伏見稻荷大社の御分霊
御神水所	太古より湧出る霊水

## ⑨ 法然上人（ほうねんしょうにん）

平安末期から鎌倉初期(1133～1212年)のお坊さんで浄土宗を興した人。<sup>みまさかいなおかそう</sup>美作稲岡荘の出身。名は源空、号は法然と呼ばれた。15歳のとき比叡山延暦寺に入門し、18歳にして俗世間との関係を絶ち、隠遁生活に入った。その後、「往生要集」（浄土教としての極楽往生をといた本）に出会ったことを契機として、しだいに浄土教に傾斜し、43歳で専修念仏へ転入した。既成の仏教や権力から迫害を受けながらも、この世におけるすべての人間の宗教的平等を説き、念仏こそが往生することが出来る道であることをつらぬいた。晩年は、摂津の国勝尾寺に住まいし80歳で死去した。

越木岩は、江戸時代の新田開発によって大きく開かれた村落でありましたから、村人達の多くは浜側のお寺の檀家で、浄土宗の開祖法然上人の教えをよく守っていた。今でも続いているが、昔は越木岩に念仏講がたくさんありました。

## ⑩ 石の宝殿（いしのほうでん）

六甲山の上にある雨乞いのための神社。白山神社の御分霊。

昔々ある年、越木岩は日照りが続き池も川も干上がってしまいました。そこで六甲山の上に石でつくった宝殿を建てて天に向かって



大声で雨乞いをするようになったのです。上新田は屋根の部分を受け持ち、下新田は下の部分を受け持つ事にしました。いよいよ石材を持って山に登る日になりましたが、下新田の人達が到着するのが遅れたため、上新田と下新田の村人達がけんかになりました。何とか完成したものの、仲たがいしたまま雨乞いをして神様に願いが届かなかったのです。それに気がついた両方の村人達は、越木岩神社の前に集って一緒になって、ごまを炊き心一つにして祈ったところ、大粒の雨が降り出したそうです。

## 西宮神社・西宮えびす神社

現在の本社には、中の間に天照大御神、東の間に蛭子命、西の間に須佐之男命と大国主命を配し、四柱の祭神が祭られている。境内には、摂社として廣田神社南宮社、荒戎神社、大国主西神社、百太夫神社があり、本殿横には廣田神社遥拝所や六甲山神社遥拝所などがある。【この頁は、西宮神社の葉参照】

## エビスの源を探る

えびすという言葉の意味はその字からもわかるように夷・戎・狄・胡・蛮とどれをとっても中国における異郷の人をあらわしています。えびす様のお神像の右手の釣竿は、水界と人間界の架け渡しを左手の鯛は、海の幸を象徴しているといわれていますが、漂着神としての性格として漁村では海中の石や流木、水死体や鯨や鮫をえびす様として大切に扱ってきました。室町時代から広まっていった七福神も金銀米俵を満載した宝船でやって来ます。西宮神社の御祭神が小さな舟で大海原へ流された蛭子神であるという伝承も、この地が新しい文化や魂が寄り着く瀬戸内海の終着点であったからであります。

## エビスの教えを考える

それにもまして、脚や耳が不自由であるという伝承をもつ神様を排除するのではなく、崇める対象として守っていくことで福を授けてもらうという思想は、神様が人間に与えてくれた共存共栄の知恵かも知れません。人間の心の中にある外界へのあこがれや刺激が向上心となり、生活のレベルを上げようとするのと流された神を大切に祀ることによって現世利益を祈ることは共通します。よそ者を排斥した国に未来がなかったように、えびす様が福神になるための鍵は、各人の包容力のある豊かな心とそれをあらわす行動の中にあるのではないのでしょうか。

えびす様のお姿は、「釣して網せず」のことばの通り暴利をむさぼらぬ清廉な心を象徴しています。